薬史学会通信

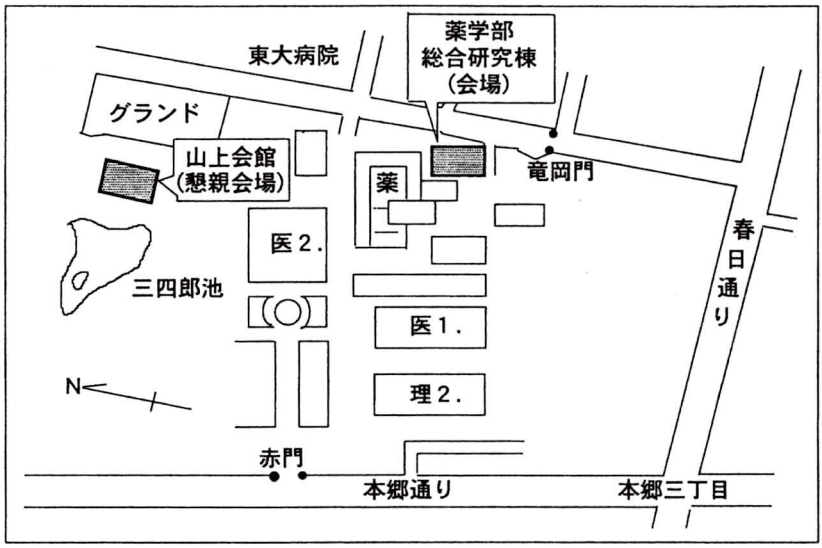
No.38　2004年９月

〒113-0032
東京都文京区弥生2-4-16
(財)学会誌刊行センター内
日本薬史学会事務局
Phone　(03)3817-5821
FAX　(03)3817-5830

日本薬史学会
2004(平成16)年度年会および創立50周年記念会
(臨時総会・臨時評議員会)
開催のお知らせ

と　　き　　2004(平成16)年10月16日(土)　10:00～

と こ ろ　　東京大学薬学部総合研究棟講堂



“創立50周年記念事業募金”について(お願い)

「薬史学会通信No.37号」に掲載の募金については、既に多くのご送金を頂き、厚く感謝いたします。未だご参加頂いてない会員の方へ、ここに再度お願する次第です。

一　口：2,000円　なるべく３口以上(締切は９月30日)

郵便為替払込み先：日本薬史学会　口座番号：0120-3-67473

通信欄に「50周年事業協賛金」と記入頂ければ幸いです。

日本薬史学会事務局

日本薬史学会2004(平成16)年 年会プログラム

2004(平成16)年10月16日(土)10時～15時50分

東京大学薬学部総合研究棟２Ｆ講堂

開会挨拶(10:00～10:05)

午前研究発表(発表時間：各20分；10:05～12:05)

1．共立薬大・松本佳代子：国会議論からみる日本の性や生殖の文化構築の歴史的考察と薬学からのアプローチ

2．東京海道病院・五位野政彦：落語の中の医薬品　第４報

3．薬史学会・辰野美紀：Ｆ．マジャンディーと近代薬物処方集

4．新見公立短大・石田純郎：ジャワの伝統的生薬、ジャムゥについて

5．東京理大・薬、○大代純也、中村輝子、遠藤次郎、九大言語研・ヴォルフガング・ミヒェル：江戸時代の輸入医薬品と国産化の試み(3)―国産化の時代的変遷―

6．九大言語研・○ヴォルフガング・ミヒェル、東京理大・薬、中村輝子、遠藤次郎：アンドレアス・クライアー(1634～97)による日本の薬品研究について

昼食休憩(臨時評議員会)

臨時総会(13:20～13:30)

午後研究発表(発表時間：各20分；13:30～15:50)

7．星薬大・三澤美和：創立から星薬科大学昇格に至るまでの節目の経緯と苦難

8．東京薬大・宮本法子、東京理大・○山川浩司：最近の19年間(1985～2003年)の薬学卒業者の就職動向の解析研究

9．薬史学会・末廣雅也：1970年代に開発された人工膵島について

10．共立薬大・西川隆：医師と協同で実践した臨床薬学小史、第１報：臨床薬学の誕生以前の初期行動

11．薬史学会・○高橋文、小林桂子：「岡本直栄」断片―日本における初期女性薬剤師の軌跡―

12．昭和大・薬　塩原仁子：我が国最古の医書「医心方」について

13．元放医研・樫田義彦：医心方編者、丹波康頼の後裔の消息

閉会挨拶

日本薬史学会創立50周年記念会プログラム

2004(平成16)年10月16日(土)　薬史学会年会終了後(16:20～17:50)

開会挨拶　会長・柴田承二

関連学会からの祝辞挨拶　日本医史学会

日本獣医史学会

日本薬史学会創立50周年記念講演

「日本薬史学会50年の歩み」　川瀬　清

閉会挨拶　山川浩司

懇親会(東京大学山上会館)　18:00～20:00

記念号予告

日本薬史学会五十年史について

薬に関する歴史の研究が、日本の薬学の進歩発展に大きく貢献するとの考えから、1954(昭和29)年に当時の東大名誉教授の朝比奈泰彦先生を初代会長として、日本薬史学会が創設され、今年は創立五十周年を迎えるに至りました。そこで薬史学雑誌第39巻第1号を、「日本薬史学会五十年史」として特別に編集し発行いたします。

本書は本会の五十年史であるとともに、戦後の日本の薬学が大きく変貌した五十年の歴史を記録したものであります。明治の初めにそれまでの漢方医薬術から西洋医薬学を導入して、その後の日本の薬学は西欧の薬学とも異なった天然物化学、有機化学、分析化学、衛生化学を軸として独自の発展を遂げてきました。薬問屋などから製薬業を起こし明治から昭和前期に製薬化学工業に発展しました。戦後はビタミン剤の製造、抗生物質の生産を経て現代医薬品の創製と製薬産業に発展して欧米に肩を並べ、その後は生命薬学、医療薬学へと大きくシフトし、最近ではゲノム医薬の世界へと変貌を遂げつつあります。日本の製薬産業もいま大きな転換点に至っています。

また医療の分野でもこの五十年の間に薬剤師の職能は大きく変貌を遂げ、病院薬剤師は臨床薬剤師へ、開局薬剤師は調剤薬局薬剤師へと変わり、百年の願望であった医薬分業も50%を超えて完全分業も間近となり、薬剤師は「地域における医療の担い手」としての役割を果たしています。これを支えるための薬学教育6年制が実施されることになりました。今こそ薬学の世界では正しい歴史観をもって活動することが必要とされています。

本会の五十年史を飾る論文として柴田承二会長の特別寄稿「正倉院薬物調査研究50年」および「日本薬史学会50年の歩み」、「20世紀の薬学概観」が掲載されています。
本書には五十周年の特別企画であった「日本の薬学戦後50年史」として、薬学の各分野を代表する方々により分野別の研究史が加筆掲載されています。これらは日本の薬学の五十年を刻む貴重な論文であります。また「明治期に創設された薬学校史」は苦難な百年を刻み乍ら発展してきて、日本の薬学教育と有能な人材を医薬社会に供給してきた薬学校の歩みを記録したものです。これらの日本の薬学の五十年を刻む貴重な論文をご精読いただきたいと思います。

この五十年史には、本会の薬史学雑誌に掲載された論文および本会が開催してきた講演会の論文表題が掲載されています。これらの日本薬史学会の記録は、この五十年にどのような事が薬学の世界で問題視されてきたかを示す証でもあります。

また本書末には「全国の主な医薬史蹟一覧」と「江戸時代の薬園、薬用植物園」が掲載されています。これらは多くの読者に知的刺激となって役立つように願っています。

2004年夏

日本薬史学会

〔関連展示紹介〕　**高峰　譲吉　生誕160年記念展**

会　場：独立行政法人　国立科学博物館

期　間：2004年12月10日～2005年1月10日(年末年始は休館)

趣　旨：タカジアスターゼ・アドレナリンの創製など不滅の功績を残した高峯譲吉博士の業績と、その後の科学・産業の発展の基礎造りへの貢献について、解説展示が企画されています。(詳細は同博物館へお問合せ下さい。)

新刊紹介

Dictionnaire d'histoire de la pharmacie ; Des origines à la fin du XIXe siècle par Société d'Histoire de la Pharmacie

「薬学史事典—その起源から19世紀末まで」

フランス薬史学会編　PHARMATHEMES 社　170×238mm　435ページ
39ユーロ(約5,500円)　ISBN:2-914399-04-9

フランス国立薬学アカデミーの創立200年記念祭(2003年11月20日、パリ、ソルボンヌ大講堂)と軌を一にするかのように、その起源から19世紀末までの主な薬学上の出来事を総覧できる事典がパリで刊行された。本事典の裏表紙に記された広告文が刊行の主旨を簡潔に伝えている：「オリヴィエ・ラフォン(国際薬史学会副会長、ルーアン大学医学薬学部教授)の監修のもとに、薬史学会会員約30名の合議によって編集されたこの事典は、医薬品の歴史、その背景および、その生涯を医薬品に捧げた人々についての興味あふれる領域にわれわれを導いてくれる。この事典が示すのは、社会文化、技術、芸術および法律に関する局面だけでなく、医薬品に関係のある様々な理論までおよんでいる。また、調剤師、ついで薬剤師の形成発展についても触れている。

9世紀頃のバクダットでの調剤師業の誕生から19世紀末までの興味あふれる旅。」

誤解のないようにいえば、遡及の年限を9世紀としているわけではない。ギリシャ、ローマ時代の人物や薬物(たとえば、アリストテレス、テリアカなど)についても詳しく触れている。調剤師の医師からの分業(薬の製造と交付)が確立された年代がここでは重視されているわけである。

編集、執筆陣の構成は、編集委員7人、執筆者34人で、項目数は約840、そのおもな項目内容は、人物(フランス人以外を含む)、薬物(薬物資源、古い剤形など)、器物(薬壷、秤、その他の調剤用具など)、古資料(エチエンヌ、ボワローの職人目録など)、旧制度(法律、団体、職種など)、古い呼称法(調剤所、病院内部の構造など)である。

説明文の詳細の度合いは項目によって大きく異なるが、古い法律や制度についての記述が詳細におよんでいるのは、その種の歴史の調査に都合がよい。

本事典の監修者によると、この事典を利用する一般大衆のより強い学術的な要望に答えるために、参考文献を3つの時代区分でリストアップしている。19世紀以前の文献46点、19世紀の文献28点、そして現代の文献70点、合計144点である。

この事典の執筆陣は、フランス人を原則としているが、唯一外国からの寄稿者として日本から奥田潤氏が「日本と薬学」および「薬師如来」について執筆している。

外国の薬学については、この他に「インドと薬学」、「英国と薬学」、「中国と薬学」、「米国と薬学」などの記載がある。

(竹中　祐典)